

鳥羽市神島の歴史と現在 — 漁村集落の空間復原 —

The History and Present of Kamishima Island, Toba City:
The Space Reconstruction of the Fishery Village

北村優季

Masaki KITAMURA

はしがき

神島は伊勢湾の湾口に位置する離島である。ここは鳥羽市佐田浜港から約一四km、渥美半島の伊良湖岬からは約四kmの距離に位置している。場所としては愛知県側に近いが、浅い漁場が志摩半島から連続しているためか、江戸時代には志摩国に属する神島村とされ、現在も鳥羽市神島町として行政上鳥羽市に属している。この島は昭和二九年（一九五四）に三島由紀夫が著した小説『潮騒』の舞台となったことから、以後一躍有名になっていった。これをきっかけに観光客も増え多くの民宿が作られたほどだが、民俗学の分野でも島の調査がなされ、さまざまな研究が着実に蓄積されてきている。島には元旦のゲーター祭や六月の漁の開始にあわせて行われるゴクア

ゲ（御供上げ）、十二月の年納めの儀式であるヤリマシヨ船など、独特の祭礼がいくつも残されており、離島独特の生活習慣とあわせて学術調査がなされたのである。

しかし、神島は『潮騒』が発表される前から注目を集めた島でもあった。その代表的業績が柳田国男によって書かれた「遊海島記」である。当時大学生であった柳田は明治三十一年（一八九八）の夏に伊良湖岬に二ヶ月間逗留し、その間伊勢湾の島々をめぐってその記録を残したのである。それは明治三五年（一九〇二）年に上記の題名を付して公刊されたが、それによると船で彼が神島にわたったのは「水無月」の望月の頃（旧暦六月）で、島にあった桂光院という寺に二泊してその住職の案内で島のあちこちを歩き、また「村隠居」と呼ばれた老人から多くの話を聞いた。彼は伊良湖から見える

神島を「仙境を望む思い」で眺めたというが、島に着いてからも精力的に島民の生活を見聞して多くの記録を残している。

神島には家の数二百許あり。多くは海の業に暇なく、世に疎きが常なれど、時ありて名古屋、豊橋あたりに往き通う者あり。

鳥羽の港よりは月に三四度、郵便脚夫、巡査などを乗せて来る船あれば（以下略）

と書き、わずかな島民が名古屋・豊橋や鳥羽との関係を保ちつつも、基本的に孤立した生活を送ったことを紹介した。

なお、この時には明治から大正にかけて小説家として名をなした田山花袋も同行している。東京生まれの田山花袋にとって伊勢湾のこの景色はよほど印象的だったようで、それを次のように記している。

丁度その時柳田君がそこに行っていて、瀟洒な貴族風な大学生ぶりをそこらに振廻して、一緒に舟で神島へと渡った。神島は今一度是非行ってみたいと今でも思っているほどそれほど好風景であった。尠くとも鳥羽水道の怒濤は海山の勝として日本屈指のものであることを疑わない⁽²⁾。

花袋が感心したのは、「鳥羽水道」の字句から判断すると、志摩半島を望む海岸とそこに打ち寄せる激しい波の光景であった。そしてそれを「日本屈指」のものと書いたが、その光景は今でも少しも変わっていない。

ところで、柳田は民俗学的な素養が発揮されたためか、島民の生

活も細かく記録することを忘れなかった。その一部を紹介すると、たとえば

北の平地は隘く、南なるは寛かなるに、なお里人が北にのみ集まりて住めるは、遠浅の舟の上下に便なると、大洋の風を厭うがためなるべし。南の浜へ行くには細き小径あり。径の両側に山の雫を堰き溜めて、わずかなる稲を植えたり。山畑に麦も作るといへど、これを合せて島人二月の糧に足らず。その余は知多郡より運ぶなるべし。

このように書いて、集落が島の北側に位置する狭い平坦地に集中していることや、それが太平洋からの強風を避けるためであることが指摘される。また南側には広い平坦地があつて水源も存在するが、そこには人家が無く、かわりにわずかな稲田が存在するという。また島の山を開墾した段々畑では麦も作付けされているが、しかしそ

れらは島民の食料をまかなうには少なく、穀物を知多半島から搬入する必要がある。たととして、神島では極端に耕地が少な

図1 神島(国土地理院)



くまた離島ということもあって、明治三十一年当時には食料の確保が大きな問題となっていたのである。

現代においても、神島の集落は島の北西部の平坦地に分布し、それに続く斜面にも多くの家が集中している。三河産の赤い屋根瓦が密集するさまは、海から見るとまるで屏風絵のような独特の景観を構成している。また、集落の内部を歩くと、比較的小さな家々が建ち並び、その間を路地のような小道が走っていて、まるで迷路に入り込んだような感覚に陥ってしまう。それはしばしば漁村に見られる景観であり、また離島集落の典型の一つでもある。こうした集落は整然とした都市計画などとはおよそ無縁の存在で、一見すると自然発生的に形成されたと見なされることが多いが、しかし土地を造成し建築を作るには、必ず施工者の意図が存在し、道路を設置することも人為的行為である。「仙境」と書かれたこの離島にも、都市と同じようにある種の計画性や構成の意図が存在したのではないだろうか。このような観点から本稿では、雑然としたかに見えるこうした集落がどのように形成されたのか、その過程を歴史をたどることで明らかにしていきたい。幸いにも神島にはそうした古い歴史を知るための資料が豊富に残されているが、こうした問題を考えることは、神島の歴史と現在を理解することにつながるはずである。

第一章 地引絵図と二つの実測図

神島の集落は山から海に注ぎ込む二本の谷川を境界として三つのセコに分かれていた。地元の人々はセコのことを部落ともいうが、方を基準として南セコ、中セコ、東セコの三つが存在する。ただこの呼称はあくまで正式のもので、一般にはイナミ（南セコ）、ナカブラ（中セコ）、ヒガセ（東セコ）の呼称が使用されているとのことである。三つのセコの中では南セコがもっとも世帯数が多いが、しかし地名・地番として登場することはなく、日常生活においてはほとんど意味を持たないようである。ただ、特別な祭礼の際には今でも重要な地域区分になっているようで、さらに昭和四〇年頃まではセコごとに寝屋が設けられ、そこで青年団が集団生活をしたとされる。セコは個人生活の比重が高まるとともに、次第にその存在意義を薄めつつあるというのが現状であろう。⁽³⁾

ところで、これらの集落の詳細を伝える資料として、小久保三郎治氏の家に伝わった一枚の絵図がある。同家は代々当主が三郎治を名乗り、幕末には庄屋を務めたことが確認されるほか、近代に入っても戸長や村長を務め、絵図閲覧の機会を与えたいだいた三郎治氏も、長年郵便局長を務めていた。また三郎治家は、小久保又左衛門、小久保猶右衛門、寺田三四郎等の家とともに島の「大元」とされ、その地位は江戸時代以来島民の誰もが認めるところであった。⁽⁴⁾さて、小久保家の絵図についてであるが、絵図は約一五〇cm四方

の和紙を料紙とし、そこに島全体の地形が描かれている。そこでは島の住宅のほか、畑や田などの耕地、墓所や寺院・神社の場所が示され、鳥羽藩の支配下で使用された高札や郷藏なども描かれている。そしてそれらは土地利用の種類によって白、黄、緑、ピンクなどに彩色され、海も鮮やかな青色で表現されている。さらに宅地や耕地には一筆ごとに番号が付けられ、土地所有者の確定作業と密接な関係があったことを示している。実はこうした絵図は明治初年に全国各地で制作され、それは一般に地引絵図と呼ばれている。明治五年（一八七二）、政府は土地所有者確定のため地券交付を開始し、それをその年の干支によって壬申地券と呼んだが、その前提作業としてこうした詳細な絵図を作成したのである。しかし、明治六年（一八七三）に地租改正の作業が始まると、それにもなう土地確定作業が始まり、ここに新たな絵図が作成されることになった。地引絵図にはこの二種類があったことになるが、明治六年の絵図作成ではそれまで使われていた「屋敷」の語を「宅地」に改めたことが知られる。神島の絵図では「屋敷」が使用されていることから、この絵図は明治五年に作成された可能性が高い。また、ここには「御高札」が描かれているが、高札場が明治六年の太政官制によって廃止されていたことも参考になる。こうした点から判断して、小久保家の地引絵図は、明治五年の壬申地券作成にもなって制作された絵図と判断される⁽⁵⁾。

図2は、その絵図の一部分、とくに家屋がある場所を中心に掲出

したものであるが、ここでは海岸線のある浜を下に記し、そこから山側に住宅や耕地が描かれている。上が南東、下が北西の方角で、これは通常の地形図とは異なっているが、浜から上陸して集落に向かうときにはもともと実感に合う描き方で、集落に生活する住民にとっても実際の感覚と合致する描き方といえる。また、ここには合計一六一区画の屋敷が記されているが、南セコの浜側から順番に1～161の番号を記入しておいた。また浜から伸びる道についても、SI、MI、EIなどの記号を付記してあるが、これは南セコ（S）、中セコ（M）、東セコ（E）に対応するものである（この点については後述）。

これに対し、現代の土地利用はどのようなになっているのだろうか。もともと基本になるのは国土地理院発行の地形図であるが、個別の家を識別できるような大縮尺の地形図は神島の場合には存在しない。一般にはいわゆる「ゼンリン住宅地図」（ゼンリン株式会社）が便利だが、そこで表示される個人の住宅名などは大まかな目安にはなるものの、やはり正確性に欠けるといわざるを得ない。こうした狭い地域の場合には精密な土地利用図は作成されないのが普通である。しかし神島の場合、幸いにも建築学の畑聰一氏が二つの実測図を作成していてそれを参考にすることができるといえる。一つは一九七五年のもの、もう一つは一九八五年のもので、そこには集落の中心部について、個別の敷地を実測し、さらに一階部分の間取りも再現している。これによって神島では一軒一軒の家の内部までが図面として表示さ

図2 明治初年地引絵図(集落)

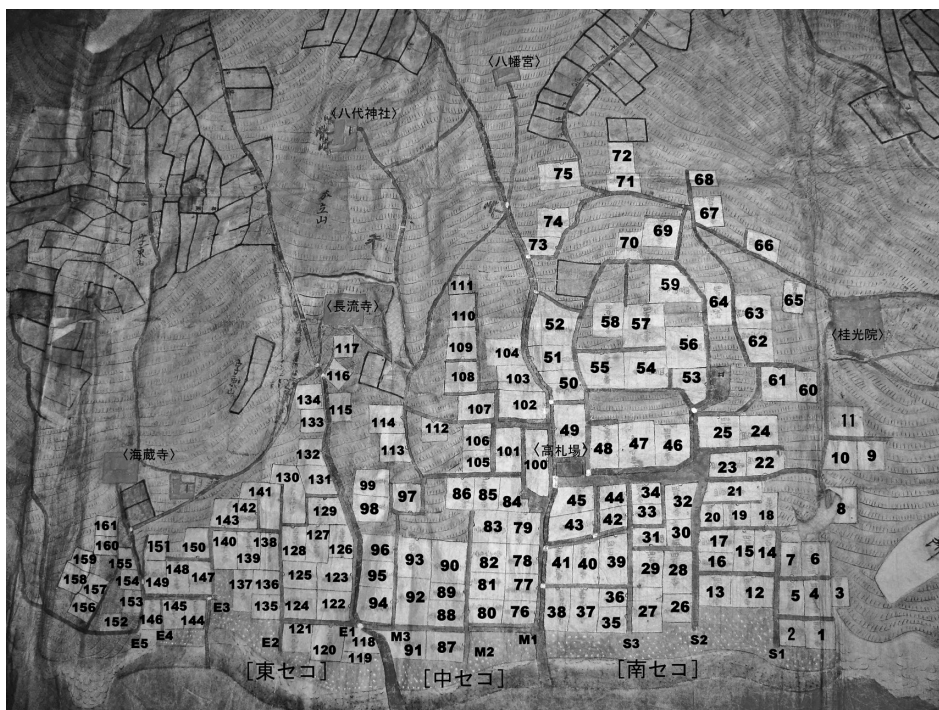
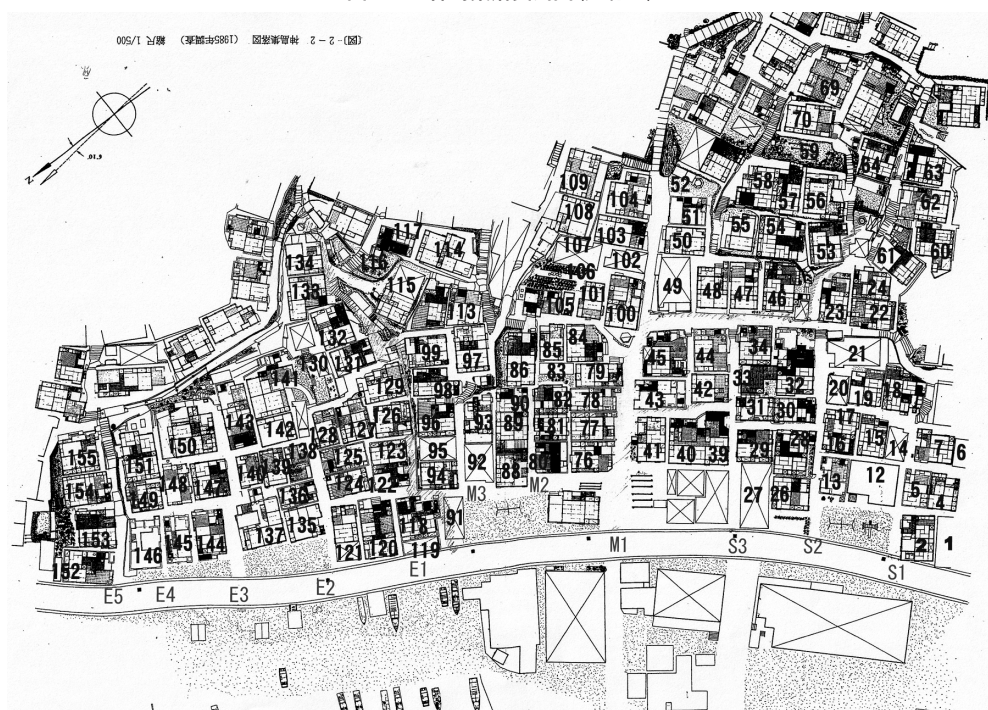


図3 85神島集落实測図(畑聰一)



れるようになったのである（以下、「75実測図」「85実測図」のように表現する）。ここでは85実測図を図3として掲出するが、神島でこれ以上に詳細な地図は現在にいたるまで存在していない。

なお、こちらにも個別の住宅に番号を付け、また道路には記号を付記した。このうち宅地の番号は、明治初年の住宅地図と対応すると想定される番号を示しているが、結論を先取りして言えば、この実測図の住宅は多くが明治初年の地引絵図掲載の屋敷と一致しているのである。つまり、現代の神島の住宅は、実は明治初年の屋敷地と一致する場合が多いということである。以下ではこの点を詳しく検討することにした。

第二章 南セコ

まず、地引絵図によって南セコの細部を見ていくことにしたい（図4）。島を流れる二本の谷川のうち右側の水流（方位でいえば南西）より右手が南セコにあたる。ここでは谷川に沿って一本の道M1が浜に垂直に走っている（正確には谷川と同じく南西の方角になるが、以下便宜的に南北ミチと記す）。ここは現在「中の通り」と呼ばれることもあるようで、三島由紀夫『潮騒』でも「村の中央の道」と表現される道である。浜からやや内側に入った場所には茶色で彩色された長方形の区画があるが、地引絵図の注記によれば、ここに「御高札」が設置された。いわゆる高札場である。また、そこ

図4 地引絵（南セコ）

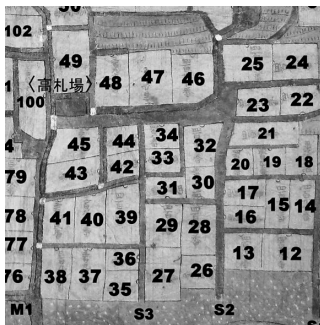
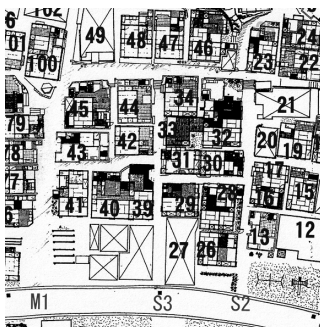


図5 85実測図（南セコ）



から山側に行くと水流が貯まる場所があり、『潮騒』の中ではそこが「洗濯場」として描かれ、多くの女性たちが集まったとされる。さらにこの道は浜から垂直に斜面を上り、途中で分岐して旧八幡宮にいたっている。地元ではこうした通行量の多い特定の道を本ミチと呼ぶとのことである。

一方、高札場の場所からは浜に平行の道が右手に走っている（正確な方位は南西になるが、南北ミチに対し、この方向の道を以下では東西ミチと表記する）。この道は途中で山側に折れ、島の三つの寺の一つである桂光院にいたる。さらにそこから右手に道をのぼると島の南西斜面に出ることができる。島の南西斜面にあたるその場所には古里の浜、祝いが浜、ニワの浜などの海岸があり、また南端の弁天岬の山頂には今も弁才天を祀る祠が建っているという。このミチは集落と島の南部の海岸とを結ぶ唯一の道であり、やはり本ミ

図6 高札場跡の時計台



チと呼ばれている。こうした位置関係が影響を与えたのか、先にも述べたように、三つのセコの中では南セコが一番広く人口も多い。

一方、畑聰一氏が作成した85実測図を見ると、海岸線に面した浜の場所に舗装道路が設置され、海岸付近の様相は一変した(図5)。この舗装道路は75実測図には掲載されておらず、一九八〇年前後に新たに増設されたものと見られるが、地元の人はいこれを「ツカの道」と呼ぶとのことである。それはこの道を作るとき地中から人骨が発見されたからだというが、だとすればツカとは墓所の意味となろうか。それ以前は砂浜が広がっていた浜辺は、この時期にアスファルトで塗り固められ、また網小屋などが建ち並んだ場所に一本の道路が貫通し、道路体系も大きく変化したことがわかる。

しかし、浜から山に向かって伸びる、海岸線に垂直の道は地引絵図と全く同じ構造を示している。図5には三本の道S1・S3があるが、

これらはすべて地引絵図の記載と一致しており、明治初年のミチが現代まで使い続けられたことを示しているのである。

さて、地引絵図では南北ミチM1から東西ミチが分岐する場所に高札場が描かれているが、実測図ではその区画が消滅し、山側の土地と一体化して一軒の家

が建っている。またその前には通称「時計台」が設けられ、これは昭和の初めに島の東部に監的哨が作られたとき、それを記念して陸軍が作ったものとされる(図6)。また、この時計台前の家は近年新しく建て直され、カフェとして再び使用されている。一方、高札場前の東西ミチ自体は現在も本ミチとして使用され続け、島の中でも重要な役割を果たしている。地引絵図ではこのミチの山側に水流が描かれているが(図4)、今それはなく、代わりに暗渠がミチの山側に続いている。おそらくコンクリートの蓋の下には、現在も細々と水が流れているものと推測される。

この東西ミチについては、地引絵図によると山側にカーブし、その先に水流とともに漢字の「井」の次が記されている(図2)。この場所を85実測図で確認するとその場所に井戸が掘られており、現在でもどこからか湧き出しているのか、細い水の流れを確認できる。地引絵図はこの点でも現代と一致するのである。

一方、東西ミチから浜側に走る南北ミチについては、いくつかの変化も認められる。まず、地引絵図では屋敷44と45の間に細い道が水流をとまって描かれている(図4)。この場所を実測図で確認すると、たしかに家44と家45の間に細い道が確認できるが、しかし水流はもはや存在しない(図5)。現在現地を確認すると細い暗渠が敷設されており、かろうじてかつての水流の痕跡を見出すことができる。しかし、幅一丁に満たないその細い道にはプロパンガスなどが置かれ、すでに街路としての機能は失われつつあるようである。

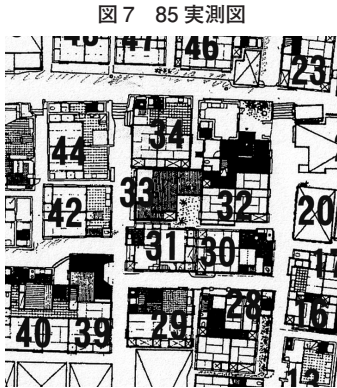


図8 32・34の境界ミチ



また、地引絵図（図4）では屋敷32と33・34の間に細い南北ミチが通っており、その道は左に折れてクランク状の形態を示している。32・34の屋敷は、この細い道によって分割されているのである。しかし、この場所を85実測図で確認すると、32と33は一体化して一つの家を形成していることがわかる（図7）。そしてかつて32と34の間を通ったミチも、行き止まりとなり消滅している（図8）。実はこの家32は地引絵図の所有者である小久保三郎治氏の家である。同家では、75実測図を見るとすでに33の家と一体化し、そこに特定郵便局を開設した様子が描かれている。しかし郵便局は間もなく閉鎖され、浜に新たな郵便局が作られるようになった。おそらくそれと同時に、小久保家は家32を店舗に改装し、そこでタバコや雑貨を販売するようになったのであろう。筆者が初めて三郎治家を訪問したのは、ちょうどタバコ店を営んでいた時期のことで、冬の寒い日

のその時の様子は、今もはっきりと記憶に残っている。ところで、三郎治家のような島の有力者については、何人かの名前が知られている。

他の漁村に於ける網元に相当するようなものが、神島において「大元」と呼ばれていた。大元は、寺田三四郎・小久保又左衛門・小久保三郎次（治）・小久保猶右衛門と四家があり、明治に入ってから岡田口左衛門家も加わった。（中略）さらに経済的な変動も伴って、大元は相次いで没落して行つた。その結果、寺田、岡田両家は廃滅し、小久保家はいづれも現在にいたっている。

では、これらの大元の家はどこにあったのだろう。実は地元ではその場所がよく知られており、85実測図の中でも確認することができる。それによると、小久保三郎治家は宅地32・33、小久保又左衛門家は56、小久保猶右衛門家は28の場所にあたり、いずれも南セコに属している。しかし残る寺田家、岡田家についてはやはり手がかりがない。この場所は地引絵図でも相当する屋敷が確認できるが、これらの大元の屋敷が南セコの比較的狭い範囲に集中していることが注目される。そのほか、島の名家として知られる雑貨店の「たっや太津屋」は39に、小説『潮騒』にも登場する銭湯があつたのは43の屋敷に比定できる。島で有名な家の多くは明治初年の地引絵図と一致する場合が多いのである。

この一方で、地引絵図では高札場前の東西ミチから山側の箇所

図9 地引絵図(中セコ)

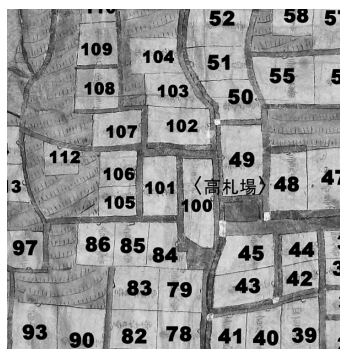
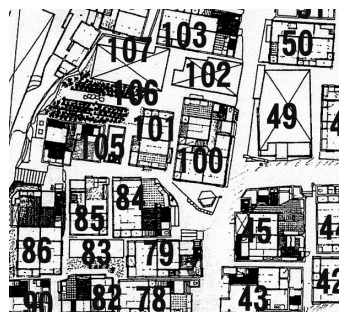


図10 85実測図(中セコ)



狭い等高線が描かれていることも注目される。実際に現地を訪れると、この東西ミチから次第に勾配が急になり、山の斜面を上るため斜面にも多くの屋敷が建てられていた様子がうかがえるが、こうした場所に家を作るには人力で平坦地を造成し、その上で家屋を建設しなければならなかった。これに対して85実測図では、この近辺にも家屋が密集し、家々の間に路地のような細いミチが走っている様子が見られるが、これらは地引絵図と対応関係のない宅地であることを示している。すなわちそれは、地引絵図が作成された後、新たに開発された住宅なのである。おそらく神島では明治時代以降人口が増加したが、そうした人々は斜面に家を設営し、あるいは畑を宅地に転用することで住宅を確保していったのである。実測図に登場する番号記載のない宅地は、このようにして形成されていた。

第二章 中セコと東セコ

地引絵図を見ると、高札場前に南北ミチが走り、この道に沿って谷川が流れている様子が描かれているが、この道が「中の通り」と呼ばれ、また「村の中央の道」と表現された街路にあたる。ここが中セコと南セコの境界であったのである。地引絵図にはこの道M1を含め、合計三本の浜に垂直なミチ（南北ミチ）が描かれている。これに対して85実測図にも三本の南北ミチM1・M2・M3が描かれていて、地引絵図のミチが現在も同じように使用されていることがわかる（図2・図3）。

この一方で、高札場前の中セコ側には屋敷100が位置しているが、この家は浜側に突き出た台形の形状を示し、周囲と比べその敷地規模が大きいのが特色である。そしてこの家の浜側と山側には二本の道が通っている（図9）。浜側の道は家100の形状に合わせて大きく曲がりながら左手に続き、さらに旧長流寺や八代神社に向かう南北ミチに接続している。これに対して、山側には水流をとまなうミチが東西に走り、いくつかの住宅の間を抜けて、八代神社に向

図11 家100山側の境界ミチ



図12 地引絵図(東セコ)

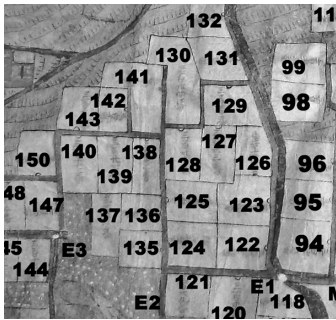
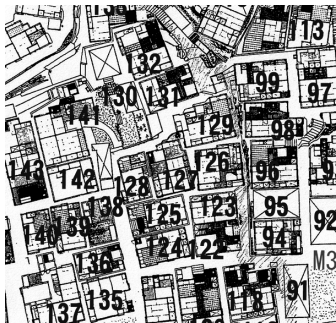


図13 85実測図(東セコ)



かう南北ミチに接合している(図2)。

この場所を85実測図で確認すると、家100は周囲と同じような長方形の宅地となり、突き出ていた三角形の場所は井戸が掘られていて大きく形状が異なっている。しかし、その井戸から左手に行くと家84と86の山側を通るミチが確認でき、かつての地引絵図の形状がそのまま保たれていることがわかる。これに対して、家100の山側には家102、107などが確認できるが、85実測図では水流は痕跡も残っておらず、また道も存在していない(図10)。今現地を確認すると、家100と102の間にはかろうじて人が通れるほどの細い道が確保されているが、それは家107に突きあたり、道はそこで行き止まりになっている。かつての水流の跡も確認できないが、家100の山側の道は現在では消滅したのである(図11)。そのため、地引絵図にあった家107と11は出入り口を確保できなくなったが、しかし85実測図を見ると現

在では家97から新しく山側への道が通り、家108、109などはその道を利用して出入り口を確保しているようである(図3)。

なお、大きな規模の家100については、住人である小久保吉夫氏から次のような話をうかがった。それによると、長方形から突き出た三角形の場所はずもととその家の土地であったが、大正年間に村の要請で土地を売り、そこに村が共同井戸を掘ったというのである。

また、この家は元来小久保又左衛門に關係する家であったというが、もしそうであればこの屋敷は小久保又左衛門家の所有したものだったのだろうか。それはともかく、85実測図にはその井戸が描かれ、現在では使用されていないものの、井戸自体はそのままの形で残されているのである。

さて、次に東セコについて地引絵図を見ていくことにしたい。同図には二本の谷川のうちの一本が山から海に注ぎ込み、それに沿って道E1が走っている。この道が中セコと東セコ境界になるが、東セコではこれを含め、合計五本の南北ミチE1とE5が浜から山に向かっている(図12)。この五本の道は85実測図でも確認することができ、基本的に現在まで残っていることが確認できる。

ただし、地引絵図に描かれた谷川は地表を流れておらず、現状ではすべて暗渠になっていて、85実測図でもそのように表現されていることに注意しておきたい。また、85実測図によれば、山側から降りてくる道E1は、家132、131の前までは確認できるが、家129の山側で行き止まりになっていることも注意される。これに対し、道E1は浜

図14 東セコ谷川の暗渠



図15 「十太郎や」



側でもその存在が見てとれる。すなわち、家94・95と家122・123にはさまれた細いミチがそれであるが、しかしこのミチも家126で行き止まりになり、細いミチの右側を流れる暗渠だけが家の脇を走っている(図13)。このように、かつて二つのセコの境界を形成した道E1は途中で消滅し、谷川だけが暗渠としてその跡をとどめているのである(図14)。そしてそれに代わるように、地引絵図には描かれていない東西ミチが家99・97に沿って作られ、道M3とつながって浜に出ることができるようになった(図13)。

東セコでは大きく変化した場所がもう一つ存在する。それは東セコの中央にある大きな屋敷の存在で、地引絵図では家130・141の場所にあたる。85実測にはこの二つの区画を一体化させた場所に広い屋敷が形成されるようになった。ここは島で「十太郎や」と呼ばれる

住宅で現在NPOが利用しているが、島内の家では珍しく門を構え、その奥には広い庭が存在していて、門から見ると左手に主屋が、奥には土蔵も作られている(図15)。

地元の方の話では、元来ここは天野重太郎氏の住居で、天野家は海運業で財をなした島の資産家の代表格でもあったという。「重太郎家」はその「重」の字を嫌い現在の「十太郎」に改めたとのことであるが、地引絵図と照合すると、この住宅が屋敷130と屋敷141を一体化して成立したことが確認される。おそらくこの土地は、ある時期に天野重太郎家によって購入されて一つの住宅になったのである。地引絵図には屋敷131と屋敷141の間に細いミチが設けられているが、一区画の住宅地が形成されたことによって、その道も自然に消滅したのである(図12・図13)。ところで、このような土地の合併は小久保三郎治家でも見られたが、それによって道が廃絶したのは、そうした道が本来私道として設定されていたことを推測させる。もしもそれらが公道として認知されていたら、個人の住宅に取り込むことは難しかったはずだからである。神島の住宅地にはこのような細いミチがあちこちに見られ、とくに浜から離れた山麓には地引絵図にない道が網の目のように通っているが、これらの道には宅地の設定にともなつた多くの私道が含まれていると推測される。そしてその性格は、古い道を残す浜側の平坦地にもあてはまるのではなからうか。神島では多くのセコミチが形成され、また時として簡単に消滅したが、それはミチに対する土地所有権の性格に由来する部分

が大きかったと想像されるのである。⁽⁸⁾

第四章 セコと道路体系

本稿ではこれまで明治初年の地引絵図および 85 実測図を比較対照することで、神島の集落を概観してきた。そして二つの資料には比定できる宅地に番号と付け、また道路の場合も対応する箇所に記号を付けた。その結果判明したのは、地引絵図の宅地の多くが現代の住宅と対応することであった。この点はとくに浜に近い平坦部の宅地に目立っているが、一方で、海岸線に近い場所では対応する住宅が存在しないケースも目立っている(図 3)。浜に接した場所に立地していた住宅の一部には廃絶したものが少なくなかったのである。ただし、全体的な傾向を見れば、地引絵図と 85 実測図は共通する部分が多い。すなわち、現在の神島が明治初期の集落形態をほぼそのまま継承したことを示している。

一方で、このことは明治初年の地引絵図の信頼性が高いことを示す事実でもある。そしてその絵図に高札場や郷藏などの幕藩体制下の施設が含まれていることは、そこに描かれた宅地やミチが江戸時代の幕末期にさかのぼることも示している。近世の神島の集落は、基本的にこの地引絵図に描かれていると考えて間違いないだろう。

さて、そうした理解をもとにして、あらためて各セコの宅地やミチの関係を概観したい。まず、南セコについてであるが、図 2 に示

されているように、南セコでは浜に垂直な南北ミチ S1 ～ S3 が方向をそろえて通っており、それらのミチを結ぶように、浜に平行な東西ミチが走っている。ただしこの東西ミチについては、南北ミチを貫通して一本のミチを形成する例は一つもなく、アミダクジの線のように、互い違いの場所に位置していることが特徴である。このことは、この地区が南北ミチを基準とし、そこから家々の出入り口を確保するための東西ミチ(セコミチ)が設けられたことを示している。

これに対し、高札場前の東西ミチ(本ミチ)でも、そこを基点に何本もの南北ミチが山に向かって伸びている。しかしそれはいずれも、高札場より浜側のミチと合体して一本の道を形成することがなく、相互に関係のない場所に位置している。高札場より山側の南北ミチは浜側のミチ E1 ～ E3 と接合しておらず、二つの地域の南北ミチは互いに独立して設定されているのである。おそらくこのことは、高札場前の東西ミチを堺として、浜側と山側の二つの地域のミチが異なる原理で設定されたことを物語るものであろう。それは高札場前の東西ミチを境界とする二つの地域性があることを意味している(図 2)。

次に中セコについてであるが、二本の谷川には含まれた中セコでは、M1 ～ M3 の三本の南北ミチが浜から伸び、それを基準として整然と屋敷が配置されている様子が地引絵図に描かれている。このうち道 M1 は、先に述べたように「村の中央の道」「中の通り」などと呼ばれた幹線となるミチで、山側に向かうと八幡宮やその近くにあつ

た水汲み場に続いている。この中セコにも、台形の家100を基準に、その山側と浜側に二本の東西ミチが走り、その奥に造成された山側の家々を結んでいた(図2)。

ところで、南セコと中セコの関係については興味深い点を見出すことができる。もし、神島が村全体として道路を設けるとすると、南セコの高札場前の東西ミチは、そのまま中セコに直行して一本の道を形成するのが自然である。しかし実際はそうではなく、この東西ミチは屋敷100に突きあたり、そこで行き止まりになってしまうのである。

また、南セコと中セコは、二つの地域を往来するには不便な道路網になっていることにも注目したい。たとえば、高札場の前にある家45から中セコの家85・86に行く場合には、中セコの東西ミチを利用すれば簡単にたどり着くことができる。しかし、東西ミチと接点のない浜側の集落、たとえば82・83に行こうとする場合には、いったん浜まで出て、その上で南北ミチを利用するしか方法がない。つまりこの点で、二つのセコは関係性が悪いといわざるを得ないのであり、道路体系として二つの集落は浜を媒介として結びついている性格が濃いのである(図2)。

次に東セコについて。東セコにはE1～E5までの五本の南北路が走っている。くり返し述べたように、このうちE1は東セコと中セコの境界となっているミチであるが、浜を基点としてたどっていくと、このミチは谷川に沿って山に向かい、旧長流寺の境内にいたって

る。これに対して東西方向には三本のミチが見られるが、いずれも貫通しておらず、東セコでも南北ミチが基準となり、それらを結ぶものとして東西ミチが分岐している様子がうかがえる(図2)。

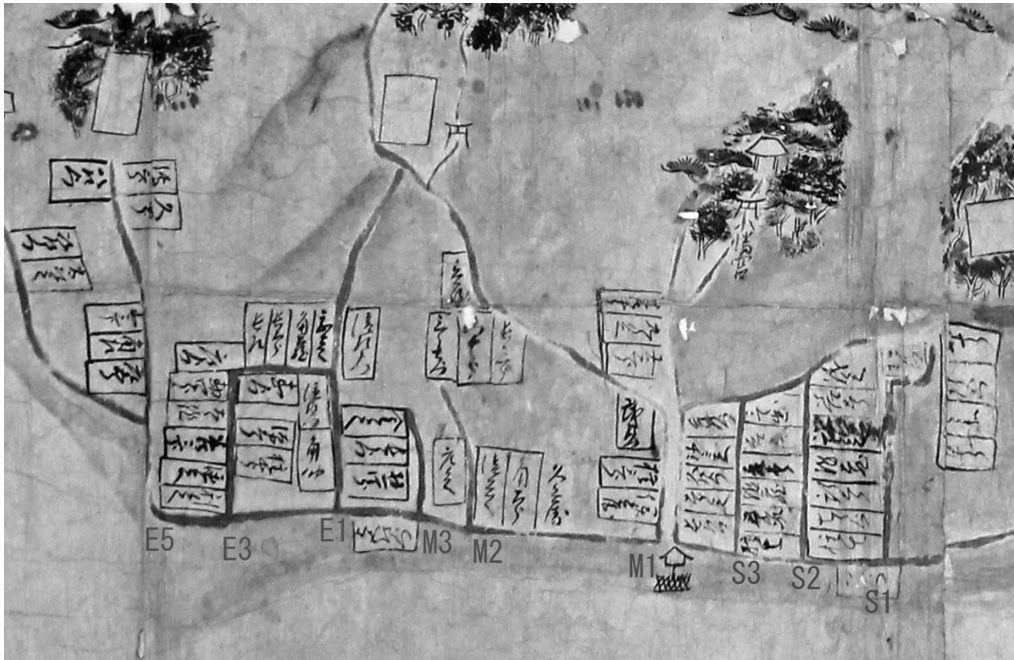
ところで、東セコの大きな特徴の一つに中セコと連絡するミチが存在しないことがあげられる。すなわち、東セコから中セコや南セコに行くためには、斜面の坂道を上って長流寺境内まで迂回するルートも想定できるが、実際には多くの場合いったん浜に出、そのうえで中セコや南セコに行くのが自然なコースになる。

道路の体系という点で、東セコはとりわけ独立性が高く、中セコや南セコとはハマを介することで初めて結びつくことができたのである。

以上のように、空間構成という観点から見ると、神島の三つのセコは浜を基点として、そこから山側に集落や道路網が形成された姿が浮かびあがる。三つのセコは集落の形態や空間構成において、一定の独立性を保持していたのである。このうち南セコはもともと屋敷数が多く(全一六一戸のうち七五戸)、しかも大元(網元)である小久保三郎治、小久保又左衛門、小久保猶右衛門の有力者三家が、いずれも南セコに屋敷を構えていた。この点からすると、三つの中では南セコが中心的存在であったものと推測される。

ところで、神島については地引絵図以外にも、近世に作成された絵図が数点存在している。それらについては、八代神社の宝物を収めた神島町文化財収蔵庫や、旧名古屋税務監督局の所蔵資料を継承

図 16 神島「村絵図」(集落部分)



した徳川林政史研究所に保管されているものが知られているが、今回新たに文化財収蔵庫に一点の村絵図があることが確認できた。^⑨ 絵図では下辺に海岸線を描き、そこを基準として正面に島の集落や道路を配置している。さらにその後部には島の南端の弁天岬、さらに島でもっとも標高の高い灯明山やその頂上に作られた燈明堂も表現されている。そのほか島の周囲に点在する岩礁なども描かれていて、島全体を描いた村絵図といえる。また、これは島の北西部に位置する神島集落を正面に据えた配置で、地引絵図と全く同じ構図である。地引絵図の原型となった絵図といってもよい。ただその表現はかなり粗雑な描き方で、地引絵図と比べると正確性を欠いていることは否定できない。

この絵図には紙背に「庄や」の清左衛門・茂左衛門、「肝煎」である九兵衛という人物の名前が記され、あわせて次のような文字が記されている。

勢州度会郡神島村

米高合式拾三石六斗八合 加子米

銀合五百六拾目 浦役

「村絵図」

残念ながらここに作成年次に関わる記述はないが、米高（石高）や浦役の数字が記されていることから、江戸時代に作成された村絵図であることは間違いない。

さて、あらためてオモテ面の絵図を見ると、中央に集落の様子が

描かれていることが注目される。図16としてその部分を掲出したが、そこではミチとともに家の区画が記され、あわせてその所有者と思われる人名も逐一記載されているのである。いずれも名前だけでなく、この点も江戸時代の絵図にふさわしい。こうした記載は今のところ他に類例がないが、合計六四戸の家の区画と人名が記され、きわめて貴重な情報を載せている。ただし、書かれた文字はやや乱雑で、画面が小さいこともあって、明治初年の地引絵図と比べるとミチや地形の位置関係も精度が劣っている。しかしそれでもいくつかの共通点が確認でき、江戸時代の神島の実態を伝える点で貴重な史料といえる。

たとえば、絵図の中央下端には浜高札が描かれているが、そこから山側に伸びて八幡宮に続く道があつて、それが現在まで残る「村の中央の道」すなわち地引絵図の道M1に相当することは容易に想像される。また途中で右手に伸びる道は高札場前の東西ミチで、この地域が南セコにあたることは間違いない。またここでは浜から三本の道が山側に通っているが、これも地引絵図のミチS1～S3に相当しよう。このように、この村絵図は地引絵図の表現とよく一致するのである。これに対し、ここでは高札場前の東西ミチから山側の範囲に宅地が一軒も描かれおらず、この点は地引絵図と大きく異なっている。しかし、それは案外江戸時代の実態を示しているのではないだろうか。すなわち、当初の集落は、東西ミチの山側には展開していなかったと解釈できるのである。

では、「村の中央の道」の左側はどのように理解できるのだろうか。まず、中央の道M1をたどっていくと、この道は途中で左側に分岐し、縦に長い長方形の屋敷の山側を通って旧長流寺境内に続き、さらに八代神社の参道に設けられた鳥居に向かつている。地引絵図にも高札場の前に台形の形状をした家100が位置し、その両側に二本のミチが伸びていた。この村絵図では道はまっすぐ山側に伸びているので、地引絵図でいえば家100の山側のミチに該当するものと考えられる。この付近の様子を見ると、この辺りにも山側にはほとんど家の記載がなく、宅地は浜から伸びた二本の道に沿って集中していることが見てとれる。この道は地引絵図の道M2、M3に対応すると見られ、この辺りが中セコにあたるものと解釈される。ここでも住宅は浜側の平坦地に集中し、山側にはわずかな家が点在するだけである。

最後に、画面の左側、すなわち東セコに相当する箇所を見ておくことにしたい。ここではまず、浜から山腹の長流寺に続く長い道が目引くが、これが谷川に沿った東セコの境界の道E1に相当することとも疑いない。すなわち、ここから左側に描かれたのが東セコで、二本の南北ミチが描かれている。地引絵図ではE2～E5までの四本の道が書かれていて、この村絵図の記載と一致していないが、このうち旧海蔵寺境内に続く道が地引絵図の道E5に相当することは間違いないだろう。地引絵図ではそのほかに二本のミチが書かれているが、しかしこの村絵図では一本の道しか存在していない。村絵図では存在した道を省略したのか、それとも当時は地引絵図の道が作られて

いなかったのだろうか。残った一本の道をどの道に比定するのかは悩ましい問題であるが、ここでは地引絵図で多くの家が集中したE3に相当するものと解釈しておく。

このように、この村絵図は粗略な描き方であるものの、基本的な道は地引絵図の道路体系と一致していることが注目される。そして宅地の配置についても、ある程度は実態の特徴をとらえているのではなかろうか。もしもそうだとすると、神島では江戸時代にすでに南セコ、中セコ、東セコの三つの集落が存在し、それらが浜に近い平坦部に集中していたことがうかがえる。山側に家が立地するのは後の時期のことであり、明治初年の地引絵図にはその開発が次第に進展していた様子がうかがえるのである。他方で、神島では早い時期から三つのセコが分立し、それぞれが浜を基点に集落を構成していたことも注目されよう。このことは、最初に設けられた特定の集落が島全体に拡大しただけでなかったことを示すからである。実は江戸時代の古文書では、これらのセコは南村・中村・東村と呼ばれていたことが知られるが、セコ内部の結びつきは「村」と表現されるような組織性を示し、そのまゝは現在よりもずっと緊密であった。そうした関係性は集落の構造にも反映していたのである。

おわりに

神島の人口は、二〇一九年時点で約三五〇人である。昭和二九年

に刊行された小説『潮騒』では「歌島は人口千四百、周囲一里に充たない小島である」と書かれたが、人口は昭和三〇年代前半をピークとして次第に減少し、それが現在にまでいたっている。現在ではかつて家屋があった場所が更地になったところも目立ち、また住人不在の家屋も少なくないようである。二〇一九年には恒例であった元旦のゲーター祭も、人手不足のため中止に追い込まれたとのことである。何百年という単位で継続した祭礼が中断したことは、現代という時代が長い歴史の大きな節目にあたっていることを示すのかもしれない。しかし何ごともなかったように、今も神島には密度の高い集落が形成されており、高台にのれば瓦屋根で埋めつくされた個性的な景観を目にすることができる。

神島では古くから漁業を生業とし、また近代になると海運業に従事する住民も増加したが、いずれの場合も海を生業の場として生活を送ってきたことに変わりない。そして多くの場合、そうした漁家は親から子へと生業が継承され、一つの「家」を形成してきた。現在の島民のほとんどはこうした住人で構成され、土地や家屋も先祖から継承した例が多い。神島では高度成長期以降に収入や職を求めて島を離れるものも増えたが、漁業に従事するものは今も数多く島に残り、先祖からの権利関係の中で生き続けたのである。

一方で、神島は離島という地理的条件のため、外部の企業や資本が流入することほとんどなかったといつてよい。そのため大規模な開発などは実施されず、古くからの土地所有者の権利がそのまま残

ることになった。実際に開発事業などを行うにはまず大型の重機を島に運び込まなければならぬが、しかしその場合には、細いセコミチや急な階段道を通行しなければならず、そうしたことは現実的に不可能である。近年神島でも海岸部分に大規模な埋め立て工事がなされ、また島の南部には新しく小学校・中学校の校舎が築造されたが、それらが可能になったのも、その場所が旧来の集落から離れていたからである。集落内部では土地を削平するなどの大規模な開発は事実上不可能で、古くからの敷地を再利用するか、古い屋敷の配置を残しながらリフォームの手を加えるしか方策がない。こうした要素もあって、神島では古くからの景観が維持されていたのである。

本稿では神島の現在の集落が明治初年の地引絵図と一致することを指摘し、さらにその原形が江戸時代にさかのぼることを説明してきた。逆にいえば、現在の神島は明治時代あるいはそれ以前の古い景観を残す、きわめてまれな土地でもあったのである。

註

- (1) 柳田国男『遊海島記』（『柳田国男全集』2、筑摩書房、一九八九年）。
- (2) 田山花袋『東京の三十年』（岩波書店、一九八一年）。
- (3) 田邊悟・田邊弥栄子『潮騒の島 神島民俗誌』（光書房、

一九八〇年）、和歌森太郎編『志摩の民俗』（吉川弘文館、一九六五年）、中山正典『民俗的時間および空間認識の変化——鳥羽市神島の事例を用いて——』（『日本民俗学』一九三号、一九九三年）。

- (4) 三重大学学芸学部地理学研究室「神島調査概報」（『三重地理学会報』第六号、一九五七年）。

- (5) 拙稿「鳥羽市神島の集落とその構造——地引絵図の分析を中心に——」（『科学研究費報告書』日本における漁業・漁民・漁村の総合的研究）所収、二〇一〇年）。

- (6) 畑聰一『共同性に基づく離島集落の再生手法に関する研究』（『科学研究費補助金成果報告書、二〇〇二年）、同「漁村住宅の高密度居住形態に関する研究（その1 漁村住宅の実態）」（『住宅建築研究所報』七号、一九八〇年）、同「漁村住宅の高密度居住形態に関する研究（その2 高密度居住の構造）」（『住宅建築研究所報』八号、一九八一年）。本文に掲出した図版は第一番目の著作（二〇〇二）に収録されている。なお同書には、神島のほか、答志島、菅島、坂手島などの三重県側の離島、日間賀島、篠島などの愛知県側の離島について実測図が作成されている。

- (7) 三重大学学芸学部地理学研究室「神島調査概報」（前掲）。
- (8) 東セコの場合も現在の住宅と一致する事例がいくつも確認できる。たとえば、雑貨店である橋本商店は家以に、その向かい

にある民宿岬は家¹³⁵に、また「十太郎や」の山側に位置する民宿喜代恵は家¹³¹に、それぞれ比定できる。この点においても地引絵図の記載と現代の住宅がよく一致している。

- (9) 拙稿「近世神島の村絵図」(『青山史学』第三三号、二〇一五年) 参照。

- (10) この絵図の存在自体は以前から知られていたが(拙稿「近世神島の村絵図」前掲)、それを確認した縣拓也氏(鳥羽市立海の博物館)が絵図全体を高精度のカメラで撮影し、あわせてそのデータを筆者に恵送していただいた。ここで紹介する画像もそれを使用したものであって、同氏にあらためて深謝する次第である。

- (11) 拙稿「鳥羽市神島の近世文書」(『青山史学』三一号、二〇一三年)、同「近世神島の漁業と租税体系」(『青山史学』三七号、二〇一九年)。

附記 本稿の作成にあたっては、神島町の藤原喜代造さん、小久保吉夫さんから詳しい話をうかがうことができた。お二人は島の「宮持ち」を務めた経験があり、隠居衆の一員でもある。さらに、鎌田由加里さんにはお二人をご紹介いただき、また集落内部にも足を運んで詳しい話を聞かせていただいた。あらためてお礼を申しあげたい。